

大会企画シンポジウム3

『発達診断の役割と可能性』

◇日時と演者

日 時：2010年9月12日(日) 15:30～17:30

司 会：服部敬子（京都府立大学）

基調報告：

- 1) 小倉直子（常葉学園短期大学，横田小児科）「事例A：保育園から小学校の特別支援学級へ」「事例B：小学校から中学校へ」
- 2) 高城寛志（寝屋川市発達相談員）「障害児保育と発達相談」
- 3) 楠 凡之（北九州市立大学）「WISK III による発達診断はどこまで可能か」「通常学級における発達障害児の理解」「自閉症の独自の発達連関を発達診断の中でどうとらえていくか」

指定討論：

- 1) 中村隆一（立命館大学，元大津市発達相談員）「地域発達臨床は「人が時を生きる」を支えることが可能か？」
- 2) 佐々木美智子（鹿児島国際大学短期大学部，志学館大学）「田中昌人・田中杉恵両氏に学ぶ」
- 3) 田中真介（京都大学）「幼児期における自己信頼性の発達診断と保育計画」

準備・運営：長崎純子（児童デイサービス和），岸本栄嗣（京都造形芸術大学），京都発達研究会

◇企画の趣旨

現在，発達検査は乳幼児健診や相談機関，教育機関などの場で広く活用されている。しかし，発達検査が，発達年齢や指数の算出，子どもの弱さの指摘だけにとどまってしまうならば，それは，養育者の不安をいたずらに助長する恐れもあろう。教育や福祉の場では個別の指導計画が重視されるようになり，子どもたちの発達の姿を客観的にとらえる手段として発達検査が多く用いられている。しかし，「発達連関」や「機能連関」をとらえる視点が無い場合，発達検査で把握された弱さの部分のみに焦点化したアプローチによって，発達の主人公である子どもたちからその主体性を奪ってしまうことにもなりかねない。

人間の発達過程には，人間として共通する発達の道筋がある。発達診断とは，その道筋を踏まえて，子どもたち一人ひとりの発達の水準と特質を明確に把握するとともに，子どもたちの内なる発達要求をとらえ，保育・教育・療育実践および子育て実践を支えていく営みといえよう。それゆえ発達診断は，発達検査による行動の現象的把握にとどまらず，今どのような要因によって発達要求の実現が困難になっているのかを見だし，発達の見える通しを持って保育・教育・療育実践を視野に入れて具体的手立ての提起を行おうとするものである。

田中昌人・田中杉恵両氏を中心とした発達診断技術の基礎的・実践的な研究の成果をもとに，人間の発達とは，それを単にスキル獲得や外的基準への適応の過程ではなく，「自ら外界に働きかけ，外界を変化させることを通じて自らの内面を豊かにつくり変えていく過程」という視点からとらえることができるようになった。人間の発達をそのように受けとめることができれば，発達の基本機構の一つとして，価値ある変化を自ら作り出していく「発達の原動力」の生成・発展のダイナミズムを認識することができよう。この「発達の原動力」を子どもたちがどのように能動的・主体的・自発的に育てているのかをとらえることが，発達診断の重要な課題となる。

このシンポジウムでは，これらの先行研究の到達点を踏まえて，発達診断の意義と役割，さらに今後の可

能性について討議した。特に、さまざまな社会的背景を持った実践現場から問題提起を受け、それぞれの現場の中で発達診断がどのような意義を持って活かされているのか、またどう活かされるべきなのか、最新の発達診断技術の研究成果を踏まえて検討した。特に、①発達診断事例の報告をもとに、②障害の発見と育児支援、療育施設における早期対応と保護者支援、巡回相談、③小中学校における学習支援と集団における友だち・役割づくり、学童保育における居場所・遊び・仲間づくり、家庭における家族関係づくり、④発達診断技術の構築における研究の視点と姿勢、⑤成人までの育ちの見通しを持った発達診断の役割、これらの観点から発達診断のよりよいあり方について考え合った。

最初に、小倉直子氏は、乳幼児期および学童期の発達診断事例を詳細に報告した。それをもとに高城寛志氏は「乳幼児健診における障害の発見と育児支援、療育施設における早期対応の意義と保護者支援、巡回相談における保育の支援や集団づくり」について、楠凡之氏は「学校における学習支援や集団における友だち・役割づくりや不登校、学童保育における居場所・遊び・仲間づくり、家庭における家族関係づくりや暴言・暴力の理解」について提起した。

指定討論として、佐々木美智子氏は、「田中昌人・田中杉恵両氏の発達診断技術の構築における研究の視点と姿勢」についてコメントした。中村隆一氏は「成人までの育ちの見通しを持った発達診断の役割」を提起した。また、田中真介氏より「自己信頼性に焦点をあてた発達診断とそれを活かした保育計画」について新たな提案と構想の紹介を受け、討議した。

このシンポジウムを契機として、保育・療育・教育などのそれぞれの実践の場で、発達診断の意義、また発達診断の活かし方を改めて問い直す機会になることを願う。

◇報告と討議の概要

■指定討論1

地域発達臨床は「人が時を生きる」を
支えることが可能か？

中村隆一
(立命館大学)

従来発達診断・発達相談は子ども時代に特有とみなされてきたが、少しずつ成人期にも拡張されつつある。しかし、こうした拡張は単なる適用場面の拡大ではなく、従来の発達理解の方法の再定義を要請してはいないだろうか。

第1に、発達相談が単なる判定をこえて、長い経過を持つようになった場合の発達を把握する尺度として、群内比較を軸とする知能指数は妥当性を持ちにくい。同時に、個人内時相間比較はふさわしいが、例えば精神年齢（年齢尺度）で成人期の発達を表現する妥当性や必然性はない。結果的に、発達の構造の変化を念頭にいった発達段階が一定の有効性を持つ可能性がある。可逆操作の高次化における階層-段階理論もその一つである。ところで、発達段階は、発達を普遍においてとらえるが、具体的な側面、個別性はそこから自動的に導き出せない。しかし、生活年齢が高くなることは、発達の原型にお

ける多様性・個別性の強まりをもたらす。それを把握する方法や技術の検討が必要ではないだろうか。

第2に、発達検査などでは一般的に検査者は被検査者と人格的關係を結ばないことで客観性を担保しようとしている。可逆操作の高次化における階層-段階理論において基本概念の一つである「可逆操作」は、それ自身の本性に基づいて可逆性をより確かなものに高めて非可逆性を生みだし新しい操作変数を生みだしていくと考えている（「可逆操作」期に続く「形成期」）。その過程で、「人格形成にも大きな役割を果たし、それが発達の不可逆性を確かなものにしていくと構想する。人格形成は社会的な関係の変化を伴うのであるが、そうであるとすれば、上記のような発達の過程を動的に把握し記述するためには、広くコミュニケーションにかかわる基本的な概念が欠かせない。さらに、発達検査が人格的關係を捨象したところで妥当性を担保しようとしているのであるから、発達診断では独自の手法と記述方法が必要となる。

第3に、可逆操作の高次化における階層-段階理論の全体について、実証的な検討が必要であるだろう。同理論は単純な「発達段階」論ではないが、下位検査項目間の共変動を指標に、下位項目間の「距

離」を数量化することが可能である。少なくとも、発達現象の原型的構造の概容を明らかにすることが可能であり、それを媒介にして、既存の知能検査・発達検査との関連も検討ができる。

最後に、発達診断・発達相談における倫理上のガイドラインの早急な検討が必要であろう。

(なかむら りゅういち)

■指定討論2

田中昌人・田中杉恵両氏に学ぶ

佐々木美智子

(鹿児島国際大学短期大学部、志学館大学)

1. 私の立場

大学院時代からの発達相談歴は、足かけ34年になる。京都、岩手を経て、現在は鹿児島で非常勤嘱託の発達相談員として、2市町、1児童デイサービス、2保育所、2障害児等療育支援事業に携わっている。法改正や政策動向の影響を受けて、職務内容は年々変化しているが、発達診断・相談のベースは故 田中昌人・田中杉恵両氏に学んだものである。

2. 人間発達のとらえ方

私なりに多くの親子に接し、また自分が年齢を重ねる過程で、田中昌人氏が生前最後の講演で述べられた事柄を再認識している。

「特に人類の進化において人間化していく過程で、450万年以上前に直立二足歩行を起こし、あるいは150万年以上前に人類の文化遺産として、道具を手にして自らの自然を変えていきました。あるいは20万年以上前に、コミュニケーションの手段を道具の手段として自らを変えていきました。(中略)それを現在の人間は何故1歳半なら1歳半、それから4歳半なら4歳半というところで一挙に我が物にしていくのか。そんなことをしたら取り間違えたり、あるいは我が物にする際にその仕方を間違えるということが起こりうるわけです。そのようなことが起こりうるから、いろいろと間違ったり虐待を受けたりすることが起きて当然なのですが、当然を当然として言うのではなく、当然なことではあるけれど、なおそれを当然なこととしないで済むためには、どういう科学的な内的な組み込み方があるのか、ここを解明していかなければいけない」

「内向きのコントロールが一歩進みながらも環境

汚染や虐待のような条件を与えると必ず失敗する、そしてそれは虐待のひどい状況が起きてしまうのです。そういうことになって当たり前であると事を起こすに任せるのではなくて、そのようなことを起こさないで済む方法があるにもかかわらず、そこがまだ十分に体系化できていません。そのような保育理論や保健理論、障害児の教育理論であってはいけないのであって、そういうところで学問や研究に手厚いやり直しといいますか作り変えていく中で、本当の意味で国民の期待に応えていくものを創り始めることができ始めています。」(「新しい大学『関西圏』を考え、創出にあたる際のいくつかの基本視点」2005年10月22日)。

3. 発達診断の実際

発達診断の前提として各種の発達検査を実施する際、個々の検査の発達の意味、および全体との関連をどのように理解しているかが、課題の提示の仕方、手順、評価の視点、すべてに関わってくる。

ビデオ『発達診断の実際⑤—3歳児—』(1998年)の中の「ハサミを使い、円形を切り抜く 3歳1か月」課題場面では、基本連関としての手の操作の水準を診る視点を、「ここではまだ、右手のハサミを内向きに内転させながら切り抜くことと、左手の紙を内向きに内転させて右手のハサミで切り抜くことに協応させていくことはできていません。3歳1か月のあやちゃんが連続片足とびで足首の内向きの制御が、左右の手の交互開閉で手首の内向きの制御が、それぞれできにくかったことと共通の特徴がでています。」(解説20頁)と述べている。「どの連関から、どの内容によって、どのような多様性において、などは生活条件の影響を受けますが、どこからその結合が始まって、1年ほどの間にそれらが連関しあって新しい2次元可逆操作を獲得していくことになり、さらにそれが4歳における2次元可逆操作の内面的結合と相まって創造的な自制心を形成していくことに向かいます。(中略)3歳半ばにおける発達診断においては、この三つの連関の様式がどのようになっているかを診ることが重要な課題となります。」(61頁)にも学んでいる。

『発達診断の実際⑦—5歳児—』(2001年)の解説、「この日、朝からいろいろありましたが、おかあさんの『あやちゃんにしかできないのよ』ということばを胸にもって、徐々に課題を通して立ち直り、立

ち上がり、新しく考える力をもったあやちゃんをみせてくれて、本当にありがとうございました。何回も心の中で、あやちゃんに拍手を送りました。このように、発達診断場面では、いわば心のトラブルを克服していく過程を、力になってあげたうえで診ることも大切であることを知っておいてください。5歳後半ではそこに生後第3の新しい発達の力が現れてきます。」(32頁)には、不手際の多い実践者として共感し励まされる。

4. 「また会いたくなる」発達相談をめざして

二人のわが子が社会人となり、恩師たちも彼岸に旅立たれた今、私の発達相談で対面する若い親子さんたちとの接し方は、おのずと変化してきた。一言で言うならば、「また会いたくなる」発達相談だろうか。発達相談活動の道のりで、1回きりの発達相談のあと親子心中に至ったケースが2例あった。2002年に起こった1例については、「親子との対話」(鹿児島子ども研究センター発行『かごしまの子ども』第22号、2005年7月)に記載し、読んでくださった田中昌人氏から、最後となった返信もいただいた。「進化の大階層の上部連関を酷使して発達連関を壊すことにならないように、痛みのリズムをしっかりと休息させたところで基本連関を使って上部連関の自由度を高めるように工夫しています(講演を休んで、少しずつ書くことでリハビリをしているということ)。これからは患いの発達と共存し、真実和解でそれぞれの生を全うさせる道を実践することは、人間すべての生きる課題となってくるでしょうから。その上に各種の技術が正しく生かされなければならないだろうと考えています(第2の大階層の発達連関と第3の大階層のそれは全く変わりますのでその点を心得たうえで話です)。」も今頃になって理解できる。田中杉恵氏の著書サイン「どうか引き続き、21世紀の子どもたちとおかあさんたちに20世紀の負の遺産をのこさないために力を尽くしていただきますよう心から願っております。2002年6月1日」も胸に刻んでいる。

(ささき みちこ)

■指定討論3

幼児期における自己信頼性の発達診断と保育計画

田中真介
(京都大学)

キーワード：幼児期と児童期、発達診断、自己信頼性、社会的交流活動、保育計画

【発達診断で大切にしている観点】

乳幼児期の発達過程では、自我・自己の形成と社会的交流活動とが発達のに関連し、全身活動系、手指操作活動系、認知・言語活動系、感情表現活動系などの発達の個別の諸局面の機能の充実と高次化が実現される。それによって、子どもたちは、自他を尊重し信頼する力を生成、発展させていく。

(1) 幼児期初期(1~2歳)と幼児期中期(3~4歳)での発達診断では、特に次の観点について観察することを重視してきた。

1~2歳頃：1) 生後10か月頃の「新しい発達の原動力」が、1歳前半に「1次元形成」、1歳半ばに「1次元可逆操作」として結実しているか。2) 「自我」が誕生し、自らを自発的・能動的・主体的に生き生きと表現できているか。単位時間あたりの活動の種類は豊かで密度が高いか。3) 運動機能、手指操作、認知・言語機能、社会的交流の各局面の発達水準に顕著な乖離はないか。

3~4歳頃：1) 1歳後半から2歳半ばまでに「自我の拡大」が実現され、自己主張は明確で力強いのか。2歳後半に多様な「2次元」の認識と活動が豊富に柔軟に展開され始めているか。2歳後半から3歳前半に自他を「同じ」とする対関係の認識と価値づけの力が獲得され、「自我の充実」が実現しているか。2) 内臓諸機能の成熟による「感受性の増大」、「身辺の人間の自立」、「自我の拡大と充実」が相互に結びついて発達しているか。3) 自我の育ちを支える保育・療育体制が整えられ、自分を「ワタシ」「ボク」等と表現し始めて自分自身を大切にするような新たな自己信頼性が獲得されているか。

(2) 幼児期後期(5~6歳)の発達診断では、「発達の3次元」の充実と「新しい発達の原動力」の生成をとらえ、その中で繊細に自他の価値を感受する力の萌芽を観察してきた。特に、通常の発達検査以外に、「自己形成視」(成長画)と「自己多面視」(三方向画)および「3次元形成」(系列円描画など)

の発達診断をもとに自己信頼性の発達の水準と特質を次の諸観点で評価している。

1) 自己認識: ①自己形成視と自己多面視: 自分自身(そして友だち)の変化・発達をとらえる力、それ自体が発展し、自分を新たな視点から見る力と関連しているか。②夢見る力: 「過去→現在」を新たにとらえる力が形成され、「現在→将来」を見通し、夢見る力(=新しい自分を発見し創造していく力)へとつながっているか。③期待のシステム: 時間的な変化の認識(論理的な思考力)が、好きなもの・楽しみなこと・好きな人との出会いなど将来への期待によって育まれているか。④論理性: 時間の流れの中で、自分の変化・発達をとらえる力がつき、「～シテカラ～スル」「…ゆえに…となる」といった思考力の萌芽が形成され、それが自分の新たな魅力の発見につながっているか。⑤自発的・能動的・主体的に視点を移動させる経験によって、自己(他者)を多面的に見て自己の価値を新たに発見する力が形成されているか。

2) 自他の評価力: ①(多段階的・形成的な評価)自分や友だちを二分的に評価(小-大, 強-弱)するだけでなく、中間項を入れた繊細な評価(小-中-大), 発達の・形成的評価(だんだん…)へと発展しているか。②(第3の新たな視点, 多価的な・多様な視点からの評価)三方向画で「横から見た自分」(自分の目では直接には見えないもの)をイメージでき始め、自他を新しい視点, 新たな角度から見る(評価する)ことができ始めているか。また、3段階以上のきめ細やかな評価, 「△△は下手だけど◎◎は上手だよ」といった角度を変えた、多彩な視点からの自己評価ができ始めているか。

3) 発達連関: 自己信頼性は、発達の全局面と相互に関連しあって発展する。全身運動(跳び箱, 鉄棒), 手の操作(手の把握操作)さらには、地域認識(「○○ちゃんのうちまで自分で行ける」と自信を持つ)と自己認識が関連して発達しているか。

子どもたちは自らの発達過程(いわば過去)を新たに発見する力を得るとともに、自らを多面的に新たに発見することによって、自己を新たに評価し、未来を質的に新たに創造する力を得る。

【発達をとらえた保育計画】

子どもたちの発達についてのこのような新たな発見に基づいて、保育・療育の内容と方法を次の観点から新たに検討し構想してきた。

(1) 発達の豊かさを評価・把握する観点:

①生活基盤が整い、生活の中で各種の多彩な発達の1次元, 2次元, 3次元, 及びそれぞれの可逆操作が展開され、その中に「自己」が位置づけられているか。②自我が充実して自己への信頼性が育ち、社会的交流活動の次元(基本単位)と新たな可逆操作の生成・結合・充実・発展の力につながっているか。③獲得した力を多様に発揮できているか。

(2) 発達連関を組織し、社会的交流活動を媒介として「間接性」を充実させる観点:

①他者との社会的交流活動(自分と相手との間の相互交流)を通じて自分を生き生きと表現し、それがさらに新たな人間関係を作り出しているか。②発達の諸局面が交流活動を通じて関連しているか。③保護者の子育て、保育者の専門的力量的の改善・洗練のための支援・行財政施策は充実しているか。

(3) 行動の「社会的な交換性」を高める観点:

①「人」の普遍化: 自我の場(安心して心開ける時間・場所・相手)として第2者(保護者, 保育者)を確定させるとともに、第2者を普遍化できているか。②「場」の普遍化: 環境条件が変わっても、同じ力を発揮できるか。

(4) 多様な集団を組織する観点(帰属集団の確立と活動集団の組み換え): 多彩な課題・規模・テーマを持った集団の活動を通して、各自の異なる持ち味が引き出されていくように導く。①生活・当番・学習・地域別集団, 遊び・趣味等のテーマ別集団など。②同年齢・異年齢集団, 発達階層(段階)別編成・混合編成など。これらの集団編成が工夫され、それぞれの温か度かつ切磋琢磨する仲間関係の中で自分を見る目が充実発展し、友だちをも繊細に発達の的に、温かくふくよかに評価でき始めているところを多面的・形成的・発達の的に評価する。

子どもたち・大人たちの発達への限りない尊敬と信頼と期待に基づく保育・教育の実践活動を新たに構想していくことによって、人類に共通する新たな普遍的な価値が発見され共有され尊重されていくことが期待される。

参考文献

- 1) 田中昌人「人間発達の理論」青木書店, 1987.
- 2) 田中昌人・田中杉恵・有田知行(写真)「子どもの発達と診断」1～5, 大月書店, 1980～1988.
- 3) 田中真介(監修)・乳幼児保育研究会(編著)「発達がわかれば子どもが見える」ぎょうせい, 2009.
(たなか しんすけ)